あしなが発１１２５号
２０１５年２月吉日

2014年中（暦年）のご寄付者のみなさまへ

あしなが育英会
会長　玉井義臣

「受領証明書」ご送付と事業報告ならびにお願い

- あしなが運動50年の原点２つ
- 阪神淡路大震災、20年のご報告と20回目の「偲ぶ会」によせて
- 阪神淡路大震災の経験を活かした東日本大震災被災者のための活動ご報告
- 仙台、東京でのコラボコンサートの成功と本年の公演（米国・日本）について
- インターン生の活躍と今後の展開、100年構想での共闘
- 「あしながアフリカ遺児教育支援100年構想」と「賢人達人会」総会について

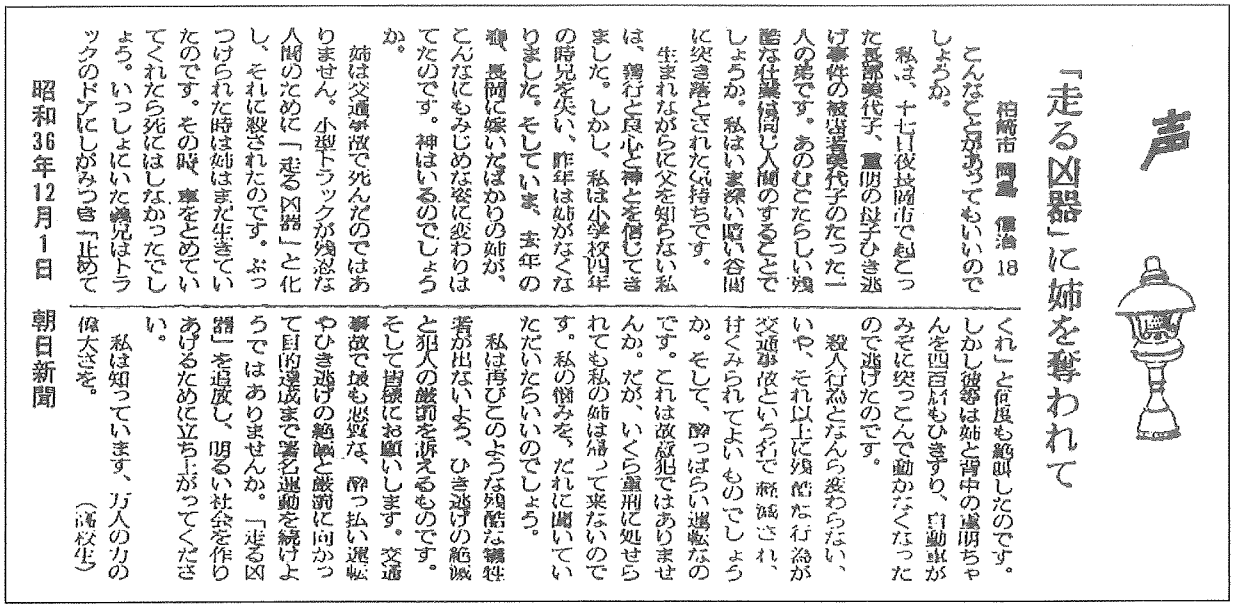
2015年の幕が開き、今年は「あしなが」にとって、運動54年目に入ります。一言に50年といっても、時代の流れの中で事業内容は徐々に変化するのが常ですが、2015年は大飛躍の年になりそうです。最初の育英財団が創立されたのは1969年5月2日。当初の救済対象は交通遺児のみでしたが、後に「あしなが育英会」（武田豊会長、玉井副会長）が設立されてから、あらゆる原因で親を亡くした遺児が奨学金貸与の恩恵が得られるようになり、現在までに9万5千人の遺児を高校・大学に進学させることができました。募金総額は1000億円を超え、以来増加中です。

さて、2014年中（暦年）にご寄付いただいた累計額が確定しましたので、感謝をこめて「受領証明書」をご送付申し上げます。そして以下にご報告等を申し添えます。是非ご一読賜れれば幸いです。

あしなが運動50年の原点２つ

50年前、夢のように日本の経済を大きくし、市民に消費の楽しみを増やし、バラ色のモータリゼーションに心を奪われているとき、心ある市民を奈落の底に落とすような自動車事故が、新潟県柏崎と大阪府の池田で発生しました。その１つ、柏崎の事故は、高校生の岡嶋信治さんの親代わりの姉さんの無惨極まりない死が、彼をして朝日新聞「声」欄への投書をさせました。

―岡嶋信治さん投書―



声

「走る凶器」に姉を奪われて

柏崎市 岡嶋 信治 18

こんなことがあってもいいのでしょうか。

私は、十七日夜長岡市で起こった長部美代子、重明の母子ひき逃げ事件の被害者美代子のたった一人の弟です。あのむごたらしい残酷な仕業に同じ人間のすることでしょうか。私はいま深い暗い谷間に突き落とされた気持ちです。

生まれながらに父を知らない私は、素行と良心と神とを信じてきました。しかし、私は小学校四年の時兄を失い、昨年は姉がなくなりました。そしていま、去年の暮、長岡に嫁いだばかりの姉が、こんなにもみじめな姿に変わりはてたのです。神はいるのでしょうか。

姉は交通事故で死んだのではありません。小型トラックが残忍な人間のために「走る凶器」と化し、それに殺されたのです。ぶつけられた時は姉はまだ生きていたのです。その時、車をとめていてくれたら死にはしなかったでしょう。いっしょにいた義兄はトラックのドアにしがみつき「止めてくれ」と何度も絶叫したのです。しかし彼等は姉と背中の遺児ちゃんを四百㍍もひきずり、自動車がみそに突っこんで動かなくなったので逃げたのです。

殺人行為となんら変わらない、いや、それ以上に残酷な行為が交通事故という名で軽減され、甘くみられてよいものでしょうか。そして、酔っぱらい運転なのです。これは故意犯ではありませんか。だが、いくら重刑に処せられても私の姉は帰って来ないのです。私の悲みを、だれに聞いていただいたらいいのでしょう。

私は再びこのような残酷な犠牲者が出ないよう、ひき逃げの絶滅と犯人の厳罰を訴えるものです。そして皆様にお願いします。交通事故で殺も悪質な、酔っ払い運転やひき逃げの絶滅と厳罰に向かって目的達成まで署名運動を続けようではありませんか。「走る凶器」を追放し、明るい社会を作りあげるために立ち上がってください。

私は知っています、万人の力の偉大さを。（高校生）

昭和36年12月1日　朝日新聞

全国の人びとが新聞を読んで131人から励ましの手紙が届く。彼は全員にお礼の手紙を返す。このやりとりが6年続き、岡嶋さんの心の傷は徐々に癒され、立ち直り、「交通遺児を励ます会」をつくり、地道に遺児たちを励まし元気づけ、今も続けています（岡嶋さん当時24歳）。この息の長さ、50年超が素晴らしい。

一方、玉井は、母の交通事故死の枕頭で1か月余、所得倍増論を牽引する自動車産業が交通行政不在の中で人間をムシケラのように殺してゆく実態を調べて、朝日ジャーナルで「ひかれ損の交通犠牲者」として告発し、当時殆どいなかった「脳外科医を増やせ」「自賠責死亡限度額を増やせ」「加害者への罰は禁固刑に懲役刑も加えよ」と提言し、いずれも法制化されています。これで被害者救済は大きく進みました。権力へのペンの勝利でした。

―玉井の提言―

朝日ジャーナル1965年7月18日号、同1965年9月26日号、『交通犠牲者』（引文堂1965年）など。

Ⅰ：救急医療の向上・・・3割が犬死 → ①脳外科医を増やせ（当時は多くても全国で200人）→ ②脳神経外科の講座を増設せよ（当時は5つの大学にしか存在しなかった）→ ③今、脳外科医のいない総合病院はない（2010年末現在全国で6695人）

Ⅱ：自賠責保険の限度額の上昇・・・母、死亡当時50万円 → ①1966年150万円、翌年300万円→②第9回交通遺児と母親の全国大会で自賠責の死亡保険限度額3000万を訴え、10年後の1991年に実現

Ⅲ：刑法211条「業務上過失致死傷外罪」の改正・・・東京に自動車がなかった明治時代の法律がそのまま使われていた→1968年5月21日改正法成立。それまで最高3年の懲役刑が5年に延長された。

なぜ今これをふたたび書くかというと、運動も50年を超えると。あしなが運動の源流を知らない世代が増えて、なぜ運動は生まれ、どう進み、今何が問題であり、それに対して運動をどう進めようとしているかの振り返りも、無駄ではないと思うが故に書いていきます。原点回帰です。風化させないように運動の理念、行動をふたたび考え、原点のヒューマニズムを忘れずに、世界に拡がる国際戦略を理解し、運動を共にすすめる同志として、皆さまに腕を組んで前進していただければ本当に嬉しいと思っています。お願いします。

2014年の「受領証明書」をお届けいたします

さて、2014年1月1日から12月31日までのあなたさまからのご寄付の「受領証明書」をお送りいたします。多くの方からのご寄付に心から厚く御礼申し上げます。ご寄付合計額は46億428万5063円となり、東日本大震災遺児支援へのご寄付が5割減少しましたが、全体では前年比約1割減となりました。本当にありがとうございました。大切に使わせていただきます。

2014年中にみなさまから寄せられましたご寄付額（2014年1月～12月）は次の通りです。

・あしながさん奨学金	13億5147万8837円	(昨年比　96.9%)
・使途を限定しない一般寄付	18億2825万　905円	(昨年比 137.3%)
・虹のかけはしさん	1億1244万4544円	(昨年比　98.9%)
・海外遺児支援	3億1565万8127円	(昨年比　62.6%)
・その他	1176万　740円	(昨年比　28.6%)
・東日本大地震津波遺児支援関連	9億8469万1910円	(昨年比　52.8%)
合計	46億　428万5063円	(昨年比　87.7%)

阪神淡路大震災、20年のご報告と20回目の「偲ぶ会」によせて

阪神淡路大震災、20年のご報告

今年は阪神淡路大震災から20年です。どうか皆さまも、あの日を想い出してください。当時あしなが育英会はこの震災の遺児を救うために獅子奮迅の活動を繰り広げました。そして、それを進めていくうちに、今まで思いもしなかったところまで、運動が拡がっていくこととなったのです。

大震災の後、皆さまから寄せられた温かい義捐金や寄付金を、遺児たちを探し出して渡す活動を進めていた際に、我々に「遺児に対しての援助は金銭的なものだけではダメだ。心のケアまでしていかなければいけない」と決意させる、あるできごとがありました。

遺児たちが特殊な行動をとるようになったのです。震災が発生した5時46分になると目が覚める子。暗いところが怖くて夜も電球をつけておかないと眠れない子。エレベーターに乗れない子。中でも我々をもっとも驚かせたのは、海水浴のつどいで、トーテムポールに月と星が輝く夜空に七色の虹を描き、その赤の部分だけを後から黒いペンキで塗りつぶしていたことでした。描いたのは、かっちゃん（当時小4）。地震後9時間、父と妹と共に倒壊した家の下敷きになっているうちに父と妹だけが息を引き取っています。母や兄たちが何度も大声で「かっちゃん、かっちゃん！」と呼んだといいます。だが、かっちゃんはわかっていても「はい、ここにいるよの声が出なかった」と助けられたあと答えています。我々スタッフはこの絵を「黒い虹」と名付け、どんな状況の時にこんな絵を描くのかと皆で話し合いましたが、わかりません。心理学者の方さえも、よく解釈できませんでした。私（玉井）が思うに、かっちゃんや多くの子らの混乱する心象風景だったのでしょう。

そして、震災遺児がこの状態から癒されるまで、“駆け込み寺”となる場所（後に、遺児たちの心の状態が黒い虹から綺麗な虹に戻るようにという意味をこめて「虹の家」と名付ける）を作ろうということになりました。米国オレゴンに先駆的な癒しの家「ダギーセンター」があると聞き、教えを乞う旅に出ました。すると何とダギーセンターでも、親の死で深い心の傷を負った子が、はじめは黒だけの絵を描いていたのが、癒しが進むと、色彩が豊かになり、やがてきれいな虹を描くようになる様子が、壁に描かれていたのにはびっくりしました。人種を問わず大きなショックには心が同じ衝撃を受け、同じような絵を描くことを知って驚いたのです。やがてダギーセンター・メソッドのケアの技法を教えてもらい、以来「虹の家」（レインボーハウス）で、辛抱強く心の傷のケアを続けてきました。

話は戻りますが、遺児に義捐金や寄付を渡す際には、まず遺児を探す必要がありました。この「遺児さがし」を手伝ったのは、あしながの奨学金を得ている遺児学生たちです。彼らは新聞に発表された震災死亡者の一覧から、子どもがいる可能性がある1700世帯をローラー調査作戦で探し、名簿→区役所→現場→移転先と確認を繰り返す・・・といった気の遠くなるような作業を地道に粘り強く進め、ついに1995年3月16日「遺児504人（当時、後に573人まで増加）」を探し当て発表しました。

「遺児自身による遺児の救済」です。遺児学生たちの遺児母子への限りない愛情と、日頃の運動で鍛えた足腰の強い根性が、困難な遺児さがしを持続させたと言えます。そして、やがてそれが、阪神淡路大震災遺児自身が世界中から集まった義捐金・寄付に感謝して始めた**「恩返し運動」**に繋がっていくのです。いわば、この「恩返し運動」の連鎖が、あしなが育英会の活動の一番の特徴だと言えるかもしれません。

阪神淡路大震災の恩返しからサマーキャンプへ、そして「アフリカ遺児教育支援100年構想へ」

―渡邉文隆さん（海外研修生・心塾OB。現在は京都大学iPS細胞研究所勤務）からの寄稿より抜粋―

1999年、阪神・淡路大震災遺児たちが「世界からの支援に恩返しを」と、大震災に見舞われたトルコ、台湾、コロンビアの遺児たちのために街頭募金を行いました。募金は3か国へと直接届けられ、翌年には、あしなが育英会がコソボの紛争遺児を加えた4か国の遺児を日本に招き「第1回　国際的な遺児の連帯を進める交流会」（サマーキャンプ）を開催。このサマーキャンプは2000年から2007年まで8回行われました。多いときには約20の国から、津波、病気、戦争、テロなどの理由で親を亡くした遺児たちが集まっていたのです。彼らとの出会いから、私たちは非常に大きなことを教わったと思います。それは、**想像を絶する厳しい環境に生きる遺児たちであっても、「誰かのために」という志を持つことができる、**ということです。

あしなが運動は、交通事故で親を失った子どもたちが次は災害遺児に支援の輪を広げ、次は病気遺児に、自死遺児に、海外の遺児に、と広がってきました。しかし、日本のように恵まれた国の遺児ならばともかく、はるかに厳しい環境にある海外の遺児たちは、果たしてそのバトンを次の誰かに渡してくれるでしょうか？**50年間続いてきたあしなが運動がこの問いに明確に答えられるようになったのは、15年前からの一連のサマーキャンプが初めてだったのではないかと思います。**

そのような視点で世界を見たときに、アフリカというのは看過できない場所です。世界でも類を見ないほど内戦、貧困、病気に苦しんできたこの大陸において、ひときわ厳しい環境に置かれているのが遺児たちです。**国や民族に関係なく、遺児たちは愛情を受け取れる。そして、それを社会に返していってくれる。アフリカ100年構想は、このような認識なくしては成り立たないものです。その意味で、この100年の計の胎動は、15年前のサマーキャンプから、すでに始まっていたのです。**

あしながさんや、多くの先輩方から受け取った愛情というバトンを、少しでも次の走者に渡すことになってくれたら、と願っています。

このように、阪神大震災以来、あしながは全力投球して①遺児さがし調査、②遺児の“黒い虹”対策、③「虹の家」建設、と遺児の心のケアを続けてきました。それが④8年間の海外のさまざまな被災遺児らとのサマーキャンプに繋がり、その活動を通して遺児たち自身から生まれた声を基に、⑤2001年からエイズ遺児のケアのためにアフリカ・ウガンダに進出して初等教育の寺子屋を始め、学習意欲を高める。⑥海外遺児の日本への留学生を40人超、アメリカのトップ100に入る大学に4人合格するまでスキルのレベルアップをする・・・というところまで運動が拡がっていきました。

この間、遺児を含む世界の学生たちの会議で「世界2億人の遺児救済まで運動を進める」との共同宣言が採択されました。3年前から始まった「あしながアフリカ遺児教育支援100年構想」も、いわば、すべては遺児自身の志から生まれたものなのです。我々は、国内外の膨大な数のあしながさんの支援と、ボランティア学生たちの支援、そしてその支援に支えられた遺児学生自身の支援によってここまで辿りつけたのです。

20回目の「偲ぶ会」によせて

去る1月11日（日）、神戸虹の家での震災20年の「今は亡き愛する人を偲び話しあう会」に集まったのは、150人の人々、報道陣15社と超満員。私（玉井）が嬉しかったのは、20年前、両親を亡くし能面のような顔をして「生きてても仕方ない。死んだ方がましや。」と繰り返し言って周囲を心配させていた綾香ちゃんが、目の前で長女日向（ひなた）さん（6歳）、長男結友（ゆうと）さん（3歳）の子育てに表情も和らぎ、頼もしいお母さんをしていたことです。我々のマスコットガール的存在だった汀（みぎわ）さんは、大学を出たらブライダル関係の仕事につきますと元気だったので安心しました。綾香ちゃんのおばあちゃんも私より4つも年上なのに元気いっぱいでした。そして、あの時生まれ、今年新成人になる子らの顔を見て、あの時生まれた絆がまだ続いていくのだと力強いものを感じたのです。

阪神淡路大震災の経験を活かした東日本大震災被災者のための活動ご報告

―「仙台・石巻・陸前高田3か所にレインボーハウス完成」―

2011年3月11日の東日本大地震・津波から4年を迎えようとしています。本会は、当時海外出張中だった玉井の決断で震災の2日後に津波遺児（新生児から大学院生まで）への使途自由・返還不要の「特別一時金」の給付を決定し、全世界から注目を浴び、信用を得ました。国内外から多くのご支援が寄せられ2083人の震災遺児に282万円の「特別一時金」、被災地の遺児奨学生168人に30万～50万円の「住宅一時金」、合計59億3382万9048円を給付いたしました。

また、一時金給付と合わせて建設を進めてまいりました東日本大地震・津波遺児とそのご家族に短期、長期の支援、出会い、交流の場、また、遺児たちに寄り添いケアする“ファシリテーター”を養成する拠点「東北レインボーハウス」が、仙台、石巻、陸前高田の3か所に完成いたしました。

仙台は全国の震災遺児支援のセンターとして、石巻と陸前高田は地域の遺児家庭支援の拠点として活動しています。

2011年から東北レインボーハウス建設のために寄せられた募金額は49億7862万8659円（4万8985件）となり、目標額を達成することができました。つきましては、2014年3月末をもって建設募金へのご寄付の受付を終了させていただきました。ご支援いただいたみなさまに心より感謝申しあげます。

なお、2014年4月より仙台、石巻、陸前高田各地のレインボーハウスでの活動をはじめ、東日本大震災遺児への支援活動全般に使わせていただく「東日本大震災遺児支援募金」を設置させていただきました。2014年12月31日現在の募金額は6億6157万9984円となっております。

3つの東北レインボーハウスでは、神戸の「虹の家」の経験を生かし、「悲嘆をいつまでも続けては社会復帰が難しくなる。子どもたちに、できるだけ早く自信を回復させ、自らの力で勉強する姿勢を取り戻させよう」という考えの元、それぞれ外部の団体の力も借りて協働しています。

仙台、東京でのコラボコンサートの成功と本年の公演（米国・日本）について

2014年3月、あしなが育英会はヴァッサー大学（米国ニューヨーク州）とのコラボレーションによるコンサート「世界がわが家」を東京と仙台で開催しました。このイベントは、2012年に刊行100周年を迎えた小説「あしながおじさん」の著者ジーン・ウェブスターの母校であるヴァッサー大学（キャサリン・ヒル学長）と、今も読み継がれているその小説から名前と着想を得た「あしなが育英会」の間に強まる協力関係によって実現したもので、アフリカ、アジア、北米、ヨーロッパの四大陸を音楽と踊りで一つにするものです。

ウガンダの現地NGO「あしながウガンダ」が運営する“寺子屋”で基礎的な教育を受けている子どもたちによる歌と踊り、ヴァッサー大学コーラス部（聖歌隊）のメンバーによる合唱、東日本大地震・津波遺児らによる伝統的な和太鼓演奏が披露されました。この公演を演出したのは、「レ・ミゼラブル」や「ニコラス・ニクルビー」などのブロードウェイ・ミュージカルを演出しトニー賞を2回も受賞した有名な英国人演出家、ジョン・ケアード氏です。彼の天才的な演出により、3つの異なったパフォーマンスが見事に溶け合い、何とも見応えのある素晴らしい舞台となりました。ナレーションは女優の音無美紀子さんが担当してくださいました。

本公演、「世界がわが家」は、本会が現在取り組んでいる親を亡くしたアフリカの子どもたちを支援するプロジェクト（アフリカ遺児教育支援100年構想）と、本会とヴァッサー大学が共有する「すべての子どもに教育を（教育の機会の大切さ）」というより壮大なビジョンにもとづいて行われました。同時に、東日本大震災で亡くなった方たちの鎮魂と被災した方々を少しでも励ましたいという思いも込められています。

仙台公演には秋篠宮殿下と真子内親王殿下のご臨席も賜り、2回の公演は共に感動の嵐と大興奮の内に幕を閉じました。今年（2015年）6月にはさらに規模を拡げ、アメリカのニューヨーク（10日）とワシントン（12日）、そして東京（20日）の3か所で公演を行います。

他では見ることのできない素晴らしいエンターテイメントと感動が詰まったこのイベントに、皆さまもぜひ足をお運びください。チケットは3月2日発売です。お申込み方法については、3月以降にあしなが育英会のホームページあるいは機関紙をご覧ください。

インターン生の活躍と今後の展開、100年構想での共闘

2013年度に招いたインターン生たちが遺児学生たちに大きな影響を与えた好結果を受け、2014年には世界

のトップ100の大学から約100名のインターン生を招いて「あしながインターンシップ・プログラム」を開催しました。

約100名のインターン生たちは①「つどい」や②東京、神戸の心塾やレインボーハウスで、あしながの遺児学生たちと触れ合い、英会話やコミュニケーション力の強化に携わった他、③東北での被災地視察や京都での「京都学」研修を経験し、④山中湖畔に100名が一同に集まっての「世界学生会議」では遺児学生と日本のトップ校の大学生らと共に議論の限りを尽くして「アフリカ遺児教育支援100年構想」への賛同と参加の共同声明を発表しました。また、街頭募金活動もしました。

これらの活動の中で、彼らは日本や世界の遺児を救うあしながの方針に共感し、共に救済の道を探っていくことを約束してくれました。彼らの幾人かは、本会の活動に賛同するあまり、本会への就職も申し出ています。(2015年3月までの今年度に5人の入局が見込まれており、この傾向は続くと思われます。)

今後、本会が「アフリカ遺児100年構想」を実現し続けていくにあたり、彼らインターン生たちが大きな力となってくれることは間違いありません。彼らのような、いつか世界のリーダーに育っていく可能性のある学生たちが、本会の活動を通して問題意識に目覚め、世界をより良い方向に導こうという高い志を持ってくれることを、我々は切に願っています。これからも青少年に明るい目標を立てさせてやれる世の中にしていくために、彼らを含む青少年たち自身と共に、本会も一緒に考え、悩み、行動し続けていきたいと思います。

「あしながアフリカ遺児教育支援100年構想」と「賢人達人会」総会について

前述のように、阪神淡路大震災の遺児の「恩返し運動」から始まったサマーキャンプで「世界の遺児を救おう」という発想が生まれ、それはやがて「世界最貧国群のあるアフリカの遺児を救おう」という「あしながアフリカ遺児教育支援100年構想」に繋がっていきました(2012年5月4日、玉井がウガンダ・マケレレ大学の特別講義シリーズの中で、「アフリカ遺児教育支援100年構想」を世界に向けて発表しました)。この構想に基づき、3年前から具体的にアフリカ遺児の教育支援が始まっていますが、この構想を支える応援団として本会が企画したのが「賢人達人会」です。世界中の国々から「賢人達人」の名に相応しい、その国を代表する知性と見識のある方々や、スポーツ・芸術部門などでその道を究めた方々に「賢人達人会」のメンバーになっていただき、この活動と遺児たちを支えていただこうというものです。

現在(2015年1月末)までに、主に欧米の各国から既に39人の方がこの構想に賛同し、「賢人達人会」への参加をご快諾くださっています。その中には、アフリカの恩人であるアルベルト・シュバイツァー氏を大叔父に持つ、元ルノー会長のルイ・シュバイツァー氏や、世界を股にかけて活躍する指揮者の小澤征爾氏、世界的歌手アンドレア・ボッチェッリ氏など、その国の国民の尊敬を集める方々が名を連ねています。3月末に80人、最終的には100人の賢人達人にご就任いただくことを目指しており、2015年6月13日にはワシントンで、前日のコラボ・コンサートの開催に合わせ、第1回の「賢人達人会」総会を開催する予定です。

(※)「アフリカ遺児教育支援100年構想」

アフリカの最貧地域サブサハラ49か国の優秀な遺児を毎年各国1名選抜し、ヨーロッパ、北米等の一流大学へ留学させ、アフリカのリーダーに育てるという構想。

おわりに

今回は、阪神淡路大震災遺児の支援が20年という節目の年を迎えたということがあり、その際の悲惨な状況と救済への努力を思い起こすと共に、それを契機に始まった「レインボーハウスでの心のケア活動」「遺児たち自身による恩返し運動」「恩返し運動から始まった世界の遺児への活動の拡がり」そして同じく恩返しに端を発する「アフリカ遺児教育支援100年構想」について皆さまに是非ともお伝えいたしたく、その辺りを中心に活動のご報告を申し上げました。

これら全ての活動は、阪神淡路大震災の際、そして東日本大震災の際にご支援をお寄せくださった方々、あしながの遺児学生のためにご寄付くださる「あしながさん」、街頭募金にご寄付くださる方々等、すべてのご支援者の皆さまの貴く温かいご寄付のおかげで成り立っています。

我々は、これからも日本中の遺児たち、阪神淡路大震災の被災者の方々、東北の被災者の方々、それに世界中で同じ悲劇を被った遺児や被災者のことも忘れることなく皆さまと共に寄り添い続け、皆さまの温かいご寄付を彼らのためにできるだけ有効に役立てることができるよう、頑張って参ります。今後もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2015年は、世界にも日本にも大きな変化が起こる予感がします。その中で本会は、より良い世の中にするため、果たすべき役割を真剣に果たすべく決意を新たにしております。

寒さ厳しき折、皆さまにはくれぐれもご健勝であられますことをひたすらお祈りし、感謝のご報告に代えさせていただきます。